

table

建築家と建築から
街を活気づけるマガジン

vol

5



20年以上続く
「建築と子供たち」のこと

竹原義一さんの黒板授業

エマ@インタビュー

京阪神の建築事務所
若手スタッフ座談会

建築家と建築家
長坂 大×波多野崇

いつまでも
学ぶこと
特集

特集 いつまでも学ぶこと

- 02 竹原義二さんの黒板授業
- 05 20年以上続く「建築と子供たち」のこと
- 08 学生の学びかたに学びたい！ HYM@インタビュー
- 09 建築家アンケート どんな風に学んでますか？
- 10 独立した建築家に向けた日々 京阪神の若手スタッフ座談会

連載

- 12 建築家と建築家 vol.05 長坂 大×波多野崇
- 14 あとの人のオススメ
 - ・朽木順綱×菜の花食堂(大阪・梅田)
 - ・八木康行×サントベヴィトーレ(兵庫・元町)
- 21 わたしのtable 中田光輝さん(GENETO)の事務所テーブル

JIAのこと

- 16 JIA TOPICS
 - ・国際交流で中東へ(住宅部会・梅原悟)
 - ・すまいまちづくり育成塾
「T-CUBEによるボクたちワタシたちの村」(兵庫地域会・尾瀬くみ)
- 18 各地域会から“ニュースな出来事”
 - 滋賀・平居 晋 / 京都・岡田良子 / 兵庫・菅原英房
 - 大阪・坂井信行 / 奈良・山本光良 / 和歌山・瀧川嘉彦

table

建築家は自ら日々バージョンアップを心がけています。
建築家は継承するだけでなく、伝統を活かすことを心がけています。
建築家は教えたり伝えたりすることに加え、
刺激剤であることを心がけています。
建築家は学ぶことを楽しいことだと知っています。

JIA近畿支部 広報委員長 萬野光雄



竹原義二さんの 建築

撮影・岡本佳樹

建築家の竹原義二さんは「黒板授業」と題した特別講義を長年続けてきました。

黒板を目一杯に活用したその講義に感銘を受けて、

今、建築に携わっている教え子も少なくありません。

黒板授業で竹原さんが伝えようとしてきたことについて、あらためて伺いました。



黒板授業

—— 黒板授業を始めたきっかけを教えてください。

僕が大阪市立大学で富樫穎(さとし)先生と出会って、そこから非常に勤講師をやることになったんだけど、どうして教室の中だけで授業をして面白くないのね。本来であれば学生と一緒に外へ出て、あらゆるモノの見かたを感じられたらいのに、授業だとそれは難しい。それで、僕が最近見たこととかを黒板にだつと描いて話すようになって。ひとりで黒板上でやりながら、それぞれが考えることを話しあうようになったのが最初です。

そのうちに僕の授業は月曜日の1限目に決めました。というのも、黒板に描くのにも時間がかかるので、授業前から先に行って描き始めないとけなくて、だと、1限が都合がいいし、月曜日にはしたのは、学生たちがいちばん眠いな、しんどいなと思って学校に出てくるでしょ、すると、朝いちから先に入つて黒板に描き始める僕がいて、お、この授業はなにか違うなと感じ取ってくれるかなと思つてね。

—— 黒板が扱いにくいくらいに感じることはありますか。

僕には描きやすいね。どこに何を描くかというレイアウトを最初から決めてるわけじゃないんですよ。黒板の幅が6mあたりするので、図を描いたり余白に字を書いてしたり、後からなるべくレイアウトをやり直せるCAD(キャド)みたいなものとは違つて一発勝負。しかも、その場で手で描いてみせることが大事で、まずチョークで真っすぐに線を引いて、1枚の黒板の中に描きたい図面などをどう取

—— 話す内容も決めているわけじゃないんですね。

原稿があるわけじゃないから毎回変わりますよ。ただ、僕がつくってきた建築のことはあまりしゃべらない。話してもしようがないからね。それ





建築家の声

矢部直輝さん
2022年から参加

JIAに加入する前からこの活動ことは気になつていて、入ってすぐにお手伝いを始めました。1日で設計して模型までつくりるのはかなりのハードワークで、保護者さんもかりかりしたり、子どもたちも疲れたりしながら、でもとにかく最後までやりきる。あんまりそんな経験ってないと思うので、子どもたちのいい体験として残ってくれたなって思います。



完成 03

自宅の上にこども食堂を設けた社会性の高いプラン、1階にグランピング施設やコンビニがあるプラン、事前に京町家のことを予習してきた成果を活かして、通り庭や坪庭をきちんと設けつつ屋根の一部を開けて自然光を探り入れた団子屋のプランなど、子どもの発想力を傳るなかれ！という力作が続々。



模型制作 02



集まつたのは小学3年生から中学3年生まで20人の子ども達。リピーターが多いのもこの企画の大きな特徴。時間内に仕上げるために付き添いの保護者も全力で参戦。

時間内につくり終えた後は担当建築家を中心に講評会も開催。子どもたちが一人ずつマイクを握って設計意図を話すのに対して、「天井高を尋ねたら5mだというんだけど、ちゃんと町家のプロポーションが守られていて…」といった本格的な講評が続いた。

04 講評会

「建築と子供たち」これまでのダイジェスト

2004年: 第1回は6m×6m×6mの敷地に「自分の部屋だけの家」を設計、模型作りまで
2009年: 祇園祭で知られる鉢8基を90人の小学生たちと制作
2010・2011年: LEDを活用した灯籠の設計と製作、高瀬川での灯籠流しまで
2020年: コロナ禍でも途切れることなくテレワークショップで展開。アルド・ロッシの世界劇場をベーパークラフトでつくるという内容



この日参加した建築家たちの集合写真。多くの建築家が関わっています。



◀アーカイブサイト



実行委員長として現場を支えた
萬野光雄さん。



今日の一連の流れは、確かに膨らませるかといふのを見つけて、それを建築家にとっても本質的なことなんですよ。

私たちも楽しいんですよ。子どもたちが一生懸命に模型をつくるのを手伝っていると、自分が建築を勉強始めた頃のことを思い出しても初心に戻れるので。日頃の仕事ではいろんな制約があつて四苦八苦してるのでですが、この場ではそんなこと関係ない。やりたいことを形にするという原点に触れて、私たちのほうこそがリフレッシュしているのかかもしれません(笑)。ここにいる建築家は大学で教えておられる先生も多いですが、それともまた違ってね、教えるというよりは緒に考えるという感じです。その子の持つている芽みたいなものを引き伸ばして形にする感じ。でもこれつて、私たち建築家のいちばん大事な仕事と同じなんです。クライアントから依頼があつて設計を始めるんですけど、その人のただ言う通りにプランを書けばいいということではなくて。その人が希望する建築の形というのはその人自身も明確にはわかつてない。ただ漠然とあるんですね。だから、その人の本当に望むものがある手この手で引き出して見つけるのが私たち建築家のいちばん大切な仕事。それを見つければ、ついつくつてしまつたら、いくら立派なものができるても失敗なんですよ。だから、子どもたちの望むものを見つけて、それをいふことに立派なものができます。だから、



06

荒川晃嗣さん

2004年から参加

若野豪宏さん・俊作さん(小3)
今日は参加者側で

普段は子どもと建築の話をすることはあまりなくて。子どものアイデア、1階はサッカーサーフィン、屋上にサッカー場も今日まで知らなかつたけど、から建築に触れる機会ってあまりないのですごくいい試みだと思います。



4つの質問で尋ねる 建築家たちの 学びスタイル

【4つのQ&A】

- ① 現在の学びのスタイル
- ② 新たに習得したこと
- ③ チェックするメディア
- ④ 胸に刻んでいる言葉

建築家アンケート

どんな風に学んでますか？

水野 Aーの力も加速して、ますます

廣田 うん、そういう立場から、大きな建築を建てるることはできなくとも、小さくてもフィジカルな場をつくることはできると思ってるので、それは大切なと思う。

かましれない。
立ち位置を活かせるこども結構ある



YONEDA RYUTO

米田龍人さん

大阪芸術大学建築学科 非常勤助手
卒業設計では、あいりん総合センターを計画地としてスケートボーダーとしての経験を投影して設計。

川上 智 [川上智建築設計事務所]

メキシコのレゴレッタ事務所勤務を経て、現在は京都を拠点に活動。

- ①手を動かしながら学ぶ ②クラシックギター ③建築雑誌、建築ウェブメディア ④「ただ美しいものをつくりなさい」リカルド・レゴレッタ

島 桐子 [アトリエクワ一級建築士事務所]

1997年アトリエクワ設立。のんびりマイペースで仕事をしています。

- ①様々な見学会へはできる限り出向くようにしています ②特になし ③新聞 ④平面が美しい建物は美しい

松本和也 [松本和也建築工房アスク]

最近は地方での設計が中心。仕事も遊びも全力で取り組み、充実した毎日。

- ①音声と字幕も英語にして映画を観る。6割理解できればよしとしている ②英語の学び直しとマウンテンバイクで山を走るトレーリル。トレールは身体を使って地形をトレースし、感覚で環境を捉えることができる ③画面を描きながらのBBCラジオ ④特になし

矢部直輝 [イン・エクスデザイン]

- ①建築から遠いところ、あるいは別の場所で建築的に考えること ②宅地建物取引士・宅建業免許 ③athleteranking.com(陸上選手の情報や競技記録) ④特になし

建築家アンケート

どんな風に学んでますか？

水野 Aーの力も加速して、ますます

廣田 うん、そういう立場から、大きな建築を建てるることはできなくとも、小さくてもフィジカルな場をつくることはできると思ってるので、それは大切なと思う。

かましれない。
立ち位置を活かせるこども結構ある



MIZUNO SHOTA

水野翔太さん

大阪公立大学大学院 都市系専攻 建築学分野2年
卒業設計では、視覚障害者を対象とした建築課題などを取り組む予定です。その先も単純に海外で働くというよりも、順にいろんな国に暮らしながら遊牧的に建築家をやってみたいなど



HIROTA SO

水野 翔太 [イン・エクスデザイン]

- ①建築から遠いところ、あるいは別の場所で建築的に考えること ②宅地建物取引士・宅建業免許 ③athleteranking.com(陸上選手の情報や競技記録) ④特になし

建築家アンケート

どんな風に学んでますか？

水野 Aーの力も加速して、ますます

廣田 うん、そういう立場から、大きな建築を建てるることはできなくとも、小さくてもフィジカルな場をつくることはできると思ってるので、それは大切なと思う。

かましれない。
立ち位置を活かせるこども結構ある

YONEDA RYUTO

米田龍人さん

大阪芸術大学建築学科 非常勤助手
卒業設計では、あいりん総合センターを計画地としてスケートボーダーとしての経験を投影して設計。

「HYM@」インタビュー 学生の学びかたに 学びたい！

撮影・坂下丈太郎



合同卒業設計展を通して出会った3人が、そのまま「HYM@」(ヒーマ)というユニットを結成。これから社会に出ようとする彼らが考えていることは何か。

三者三様な建築との向き合いかたを聞きました。

水野 それぞれ違うことを見てくれたりして、なんでも躊躇なく言い合える。僕自身は奥手な面もあるので、勢いで引っ張つてもらえるのもありがたくて。

どんなことをやつていどかありますか。

水野 ひとりの建築家がトップに立つて事務所を構えるという時代から、それが少し厳しい時代になつてきたいですね。これから建つ建築に合わせたワークショップとかは実際にありますけど、そういう意味付けなしで後から価値がわかるような場が今は減っているような気がするので。

水野 ひとりの建築家がトップに立つて事務所を構えるという時代から、それが少し厳しい時代になつてきたいですね。これから建つ建築に合わせたワークショップとかは実際にありますけど、そういう意味付けなしで後から価値がわかるような場が今は減っているような気がするので。

4月に「卒業設計の前と後」と題したトータイプイベントをエクスで企画していましましたね。

米田 うちの大坂芸術大学で企画なんです。

が、どうせだつたら誰かとやりたい

ということこの2人を誘つて、じゃあいつ

水野 ひとりでは実現できないことでも、3人いればやりやすいこともありますし、3人の違う大学も違うのでそれの大学の先生にサポートをいただけるのも大きいですね。

廣田 そもそも3人とも考え方があまり違つて、自分ではいいかなと思つてることに対してもクリティカルに意

うな人達

水野 ひどい

こと

が全

て大事じゃないかなと考えています。

廣田 そもそも3人とも考え方があまり違つて、自分ではいいかなと思つてることに対してもクリティカルに意

うな人達

水野 ひとりでは実現できないことでも、3人いればやりやすいこともありますし、3人の違う大学も違うのでそれの大学の先生にサポートをいただけるのも大きいですね。

廣田 そもそも3人とも考え方があまり違つて、自分ではいいかなと思つてることに対してもクリティカルに意

うな人達

#見学会 #勉強会 #朝のレクチャー

木野 私は講演会や勉強会、住宅の見学会にもできるだけ参加するようにしています。就職して実務を経験すると学生の頃とはやっぱり建築の見かたが全然違ってくるし、そういう場に足を運ぶことでいろんな方とのつながりもできるので。

笹川 うらやましいです。なかなか参加できていないので。

宮田 僕の場合は、魚谷からこういうのに行ってみたらと誘われて足を運ぶことが多いですね。

木野 引っ張ってもらえる感じでいいですね。

宮田 はい。あとは京都で行われている都住研(都市居住推進研究会)にも参加していて、不動産や行政の方とも一緒に街歩きをするので、いろんな視点から京都の街を見る機会になっています。

笹川 勉強の話でいえば、うちの事務所では毎朝30分ほどレクチャーの時間があります。若手のスタッフが日替わりで一つのトピックを担当して発表してくれます。

木野 朝からすごい!

笹川 トピックは様々で、建築物を扱うこともあれば、書籍だったり、アートだったりもありますが、その発表に対してスタッフ全員で批評まで行う時間がすごく楽しくて。毎日やっているので瞬発的に思考をまとめるという点でも勉強になっています。

宮田 かなり鍛えられそう。

木野 そんな話の後にかわいい話になっちゃいますが、うちの事務所はおやつタイムがあります。そこで雑誌を広げながら榎原と話すことも多くて、ちょっとした図面の読みかたとか、私にとってはその時間が学びになっています。



#これからのこと

木野 私は小学生くらいからこの仕事に就きたいと思って、資格も早く取りたくて専門学校を選びました。特に住宅をつくってみたいと思っているのですが、もう少し広く「暮らし」というキーワードが自分にとって大事だと掘めてきたところなので、そのあたりをもっと自分で言語化できるようにがんばっていきたいですね。

宮田 大学院では京町家の研究をしていて、京都が地元でもあるので、やっぱり京都で設計をやっていきたい気持ちがあります。ただ、働きはじめると、建築ってただ図面を描くだけじゃなくて、施主さんとのコミュニケーションや役所との折衝、現場の職人さんとの関わりなど、トータルでやらなければいけないことが本当に多いなと身にしみて感じているところです。

笹川 僕の地元は箕面の新興住宅地で、西国街道のような歴史ある道も通っているけど、町並みがどんどん変わっていて、そこで建築家として何ができるのかを考えたいと思っています。今の事務所を選んだ理由も、畠が手がけた「元斜面の家」を見た時にこれだなって感じたというのもあって。神戸だと六甲山との関係もあるので箕面に通じる部分もある。そこでどういう建築をつくるか、事務所での仕事を通して学んでいきたいですね。



木野智加子さん

京都建築大学校卒業。
設計事務所を経て、2022年より
榎原節子建築研究所に勤務

独立した建築家に向けた日々

設計事務所に勤務しはじめる
と、学生時代とはまた違った学びの機会が山ほどあります。
一方で、もちろん仕事もたくさん。
そんな“建築青春時代”を過ごす若手スタッフは
どんな風に学んで、日々を過ごしているのか。
その一端を教えてもらいました。

撮影・坂下丈太郎



宮田将史さん

東京理科大学大学院修了。
2022年より魚谷繁礼建築研究所に勤務。

#自分だけの時間 #散歩 #陶芸

宮田 最近になって散歩を始めました。仕事終わりとか家まで歩いて帰ると1時間くらいで、街とか建物を見ながら歩いています。夜なんでそんなに見えないけど(笑)、頭を使うというよりは感覚的に身体に入れる感じで。気になるお店があればちょっと立ち寄ったりもします。

木野 京都はそれが楽しいですよね。私はなんだろう、結構やってるのは陶芸。建築と近いところもあるのですが、まずは無になって、でも手は動かすという時間がいいんです。建築から意識的に離れる時間を持つことも大事にしています。

宮田 どんなのをつくってるんですか。

木野 最近だと招き猫とか。

笹川 思ってたのと違う(笑)。僕は結婚して子どももいるので、自分だけの時間をとるのが難しくなっていますけど、子どもを連れて遊びに行くなど、子どもと街を移動することで見えてくることもたくさんあって。道の段差ひとつとっても危ないなとか、街の当事者意識は高まっていると感じます。



京阪神の 建築事務所 若手スタッフ 座談会

#所長との時間 #建築への目線 #自分の発言

木野 それこそ建築を見る目線って学生の頃と大きく変わっていませんか。

宮田 確かに以前はひとつの建築という感じで見てましたけど、収まりやディテールとかを見るようにはなってきました。僕も同じですけど、一方で、畠は「風景構造」という言葉を使って説明しているのですが、大きな風景のなかで建築を捉えるようにも意識しています。

宮田 うちの事務所は海外プロジェクトも増えていて、ニューヨークと香港で僕も担当を持っているのですが、そうした出張先で魚谷がどう街を観察して、設計に落とし込むのかを間近に見られることはとてもいい経験になってます。

木野 うちはスタッフは私だけ。なので、榎原とは常に一緒に動いていて、クライアントとの接したから判断をくだす場面まで、その背中がいつも前にあります。

笹川 わかります。畠は車移動することが多いので、その車中で話すことや、打ち合わせのときの場の雰囲気のつくり方に学びが多いなと思いながら、僕は横で議事録をとっています。

宮田 そういった打ち合わせの時、どれくらい発言します?

木野 悩ましいですよね、それ。私はディスカッション相手もすべて榎原になるので難しいところもあって。

笹川 畠はすべての物件を同時に見ているので、どうしてもこぼれてしまう細かい部分はあって、そこは担当している者の責任として補足することもあります。

木野 ですよね。担当者のほうが見える部分もあるはずなので、そこは拾い上げて伝えたいですね。

建築家

と 建築家

vol 05

ふたりの建築家の関係性を撮影します。

今回は、京都工芸繊維大学で
先生と学生という関係で出会った2人です。

撮影・小檜山貴裕



〈長〉建築の本質として場所性ってすごく大きなことなので、建築誌で見かけるような世界の有名建築でも実際に見てみると、その場所性も含めてあらためて気付かされることがとてもたくさんあるんです。有名建築でなくても、ふとした町並みでも風景でもいろんな手がかりがたくさん転がっているわけだから、本を読んでいるよりもよほど僕には勉強になる。やっぱり僕は人間が暮らすこの地球がどうなっているのか、その一部として建築設計があるものだと常に思っていて。大学の最終講義でも「地球のリノベーション」というテーマで話しました。

〈波〉フランスのモンサンミッシェルにトルコのカッパドキア、インドのシャトルンジャヤ、クロアチアのドゥブロヴニク…ほんとに世界中を旅されてますよね。

〈長〉できればその土地に5年ほどでも暮らしたいけど、人生1000年なきゃ無理(笑)。ただ、自分のセンサーが鈍っているとどこに行ってもだめなんです。何を見てどう感じて考えるか、結局は自分次第なので。

〈波〉私は海外までは全然行けてないのですが、京都の岩倉で「ハレニワの家」という7戸まとめて設計するという機会をいただいた時に、岩倉の自然風景をよく観察するようにしました。その竣工後も、もっと深く岩倉の自然を知らないくてはと強く感じて、3年間のうち110日は岩倉の山に登っていました。

〈長〉それはすごい。ちゃんと見る側のセンサーが働いていれば、海外まで行かなくても岩倉でも十分にいろんなことが感得できるはずで。「ハレニワの家」にはそれがしっかり表現されました。

〈波〉山に入るのは半分は趣味というのもありますけど(笑)。長坂先生は今年はどうらに行く予定ですか。

〈長〉イタリアです。20代で初めて行った国外がイタリアで、その時に訪れたシエナやアッシジあたりにはそれ以来行っていないので、40年前に見た場所にあらためて足を運んだらどう見えるだろうかと。20代で考えたこともまだいくつか覚えているので、それも含めて今の自分がどう感じるか楽しみなんです。

〈波〉ちょうど私も昨年、20年前に自分が初めて依頼を受けて設計した住宅を買わせてもらったのですが、建築家とは生き方そのものだという長坂先生の背中を見ていて、かつて毎日のように現場に通って自分で設計した住宅に今、暮らしてみたいという気持ちになったんです。長坂先生の40年に対して、僕はまだほんの20年ですけど。

〈長〉自分にとって記念碑的な建物なわけだからね。そこから感じるものもたくさんあると思う。

〈波〉最初に勤めた東京の建築設計事務所では病院や福祉施設をやっていたのですが、その頃に雑誌で長坂先生の「桂の家」を拝見して、その鮮やかなプランニングが本当にすごいなと思いました。同時に、これは個人の建築家でないと実現できないものだというのも直感的に理解できて、という頃に、ちょうど長坂先生がスタッフ募集しているという話を聞いて。

〈長〉実際、うちの事務所は学生時代から入ってくる人が多いので、経験者で入るのは珍しい。一般には最初の事務所での教えが強く刷り込まれていて、そっちの感覚になってるところからこっちの考え方を伝えるというのはお互いに大変なんですね。なんだけど、彼の場合は、前に行ってた事務所がとても堅いところで建築計画などをきちんとやっているのは間違いないって、その上で自分を変えたいところがあるからうちに来るんだろうなと。そういう意味での覚悟は感じました。

〈波〉長坂先生の事務所に入れていただくと、やっぱり会社員的な感覚とはまったく違うという経験はたくさんありました。たとえば、設計を進めていたある住宅の敷地の隣地にすごく大きな木があったのですが、開発にともなって整地されて抜かれてしまったんですね。敷地外のことなんだけど、そのことに対してすごく怒っておられる様子を見て、その住宅だけじゃなくて、やっぱり街全体のこと、公共のことを考えるのが建築家なんだなって。

〈長〉大学で何を教えてきたのかといえば、構造や技術的なこともあるけど、設計を通してどう世界と関わるか、大きさに言えば、世界はこのようにあるべきだという哲学を持てるかどうかなんですね。大きな事務所に所属していながら、個人で独立していくのが、建築家というのは本来はそういう姿勢であるべきです。施主の言うそのままではなくて、まずは建築、街、自然、人間のシステムについて自分の意見があって、その上で建築設計の仕事があって、施主がいてという順であって、このあたりは世間的にもまだ理解が追いついてないところかもしれないね。

〈波〉私も具体的に独立を考え始めたときに、自分がいいと思う建築や街のことを友人や親戚なんかに積極的に話すようにしたんです。それも、長坂先生が現場に向かう途中に見かけた建物や町並みに対して、もっと自分だったらこうするんだという意見や思考を積み重ねておられるのを目の当たりにしていたからなんですね。そうやって建築や街の話をする中で、具体的に設計やリフォームの相談したいという人が現れて、それをきっかけに独立できました。

〈長〉独立したいから仕事をください、という単純な営業



菜の花食堂

大阪・梅田

メニューは日替わり。一般利用は1,200円～(学生は540円)。



梅田・茶屋町にある高さ125mの
ビル・梅田タワーは、大阪工業大
学の都市型キャンパス。淀川沿いに広
がる大阪工業大学・大宮キャンパスと
はまた環境が違つて、こちらでは「周
囲にいくらでも生きた教材が見出だ
れるし、大阪のまちの様子を俯瞰的に
把握することができるんです」という



朽木順綱さん

京都工芸繊維大学建築学専攻 教授
大阪工大で11年間勤めて、現在は京都工芸繊維大学に勤務。



あの人のおすすめ

建 築 家 の 行 き つ け 店 か ら 考 え る 、 街 領 の 話 。

Recommend Shop

元

町の商店街内にあるビル内にアト
リエを構える八木康行さん。夜遅
くにスタッフを連れてふらっと訪ねた
のが、こちらの「サントベヴィトーレ」
との出会いだそう。その当時は元町駅
そばの雑居ビル3階にあったが、20年
11月に生田新道沿いの現在地へと移
転。よりナチュラルで抜けのいい飲食
空間となつた。なかでも自然光の入る
窓際のテーブル席が八木さんのお気に入
り。「いい光が入るので、ランチミー
テイング」と言いながらここで画面を広
げることもありますよ。スタッフには、
今日は「シーランチ」にしようかつ
て。チャールズ・ムーア設計による海
辺の名リゾート建築「シーランチ」と八
木さんの事務所の頭文字「SEA」をかけ
た言葉遊びだ。

系列店でも人気の石窯焼きのピザ
は、もちつとした生地に、持ち上がり
たままでおいしい「神戸スタイル
」。ワインはグラスだけでも赤・白で
各8種々を常時揃え、店長にしてソ
ムリエの井上健さんが料理に合わせ
てオススメを提案してくれる。「建築
と料理は近いところがあつて、実際
に行って体験し、味わうことには
何もわからない。写真でいくら見て
いても、ね」と八木さん、いい店には
「福利厚生も兼ねて」スタッフを連れ
ていくのだそうだ。



八木康行さん
ステュディオエイトアーキテクツ
<https://studio-8-arc.net>



グラスワイン950円～。
4種のチーズピザ2400円、16ヶ月熟成生ハム1,800円など



通し営業で暮飲みにも最適。

兵庫地域会による すまいまちづくり育成塾「T-CUBEによるボクたちワタシたちの村」

p05で紹介した京都地域会の活動だけでなく、兵庫地域会でも子どもたちに向けた、独自の建築教育プログラムを2011年から実施しています。これは、T-CUBEと名付けられた9cm×9cm×9cmのダンボール製の立方体を用いたワークショップで、ひとつの建築物ではなく、建築が互いに影響しあいながら存在していること、共用空間の大切さ、そして、まちづくりや地域コミュニティへの意識を育むプログラムになっています。毎年、小学校や中学校と連携しながら開催。今年7月に実施した23回目となる育成塾では、大阪の開明中学校の2年生全員が参加して、約300人の中学生と約40人の建築家が向き合う大規模な授業となりました。



プログラムの流れ



プレ授業

さまざまな町並みや集落の成り立ちについて伝えるとともに、建築家の仕事内容を紹介する時間も設けている。また、T-CUBEの実物大模型(1.8mの立方体)を用意して、そのスケールを体感。以降の作業を実感を持って進められるようにという工夫も。

個人作業

まずは個々にT-CUBEの内部空間の使い方を自由に考えて、スケッチを描いてみる。

2人1組で

それぞれのT-CUBEに窓や扉などの開口部を開けた後、もうひとつ別の共用T-CUBEを含めた3つのT-CUBEをどうつなげるか、2人で話し合う。3つつながったT-CUBEはいわば建物のようなもの。

2人×3=6人グループで

3つつなげたそれぞれのT-CUBEを紹介しあった後、丘や池などの地形があらかじめ設定された敷地に集まったT-CUBEを配置して村をつくる。

クラス全体で

それぞれのグループごとの村について発表しあった後、村をつなげて大きな街をつくる。

実行委員長を務める尾瀬くみさんの話

私自身は2016年から関わっていまして、2022年から実行委員長を務めています。プログラムの内容はスタートした2011年からほとんど変わっていくなくて、立ち上げたみなさんからは自由に発展させてくださいねと言われているのですが、ささやかなアレンジが入った程度。立ち上げ時からよくデザインされたプログラムなんです。

参加する子どもたちは手と頭の両方を使いながら、かつコミュニケーション力を発揮して進めていくのですが、特にコロナ禍以降は、子どもたちの間でも対話するという時間が減っているので、その点でも学校側から評価をいただいている。6人で村の形を考えていく際には、「お店を集めてお金儲けができるようにしたい」「いい景色が見えるように配置しよう」とかって班ごとに個性が表れてくるので興味深いですね。

この数年は中学校のキャリア教育の枠組み内で実施していて、建築家になりたいという気持ちにダイレクトにつながる子もいます。私たち建築家にとってもデザインや造形面でのアドバイスだけでなく、子どもたち同士の話し合いをうまく促していくようなところでも能力を発揮できますので、大きな学びの機会になっています。



JIA (The Japan Institute of Architects) とは

JIA=日本建築家協会は、建築家が集う公益社団法人です。建築、まちづくりを通して社会公共に貢献する活動をしています。その近畿支部では滋賀、京都、兵庫、大阪、奈良、和歌山の各地域会と、さまざまな委員会、研究会、部会が活動をしています。

<https://jiakinki.org/>

JIA近畿が行っている建築イベントやコンペ、おすすめ情報などはホームページで更新しています。

国際交流事業で中東へ。
AIAとの交流も深まっています。

24年10月、JIA近畿支部住宅部会－国際交流事業－にて、コロナ禍後では初の海外視察として、昨今、急速に発展を遂げる中東の都市であるUAE（ドバイ／アブダビ）、カタール（ドーハ）を訪問しました。参加者は18名。近畿を中心に他の支部からも加わり、建築家のみならず構造家や建築メディアなど、多岐にわたるメンバーが集まりました。今回の視察では、刺激的で進化しつづける現代建築やアートのダイナミズムを実体験し、新たな視点を得ることに。しかも、ドーハにあるカタール国立図書館では、偶然、設計者であるレム・コールハース（OMA）に



遭遇するなど、記憶に残る出来事が多く、楽しく濃密な時間を過ごしました。また、視察だけに留まらず、現地のAIA（アメリカ建築家協会）中東支部メンバーとシンポジウムなどを通じて交流し、通常では見学できないエリアを案内していただきなど、直接、国際的な視野を広げる貴重な経験となりました。帰国後には、AIAインターナショナルからの招待で「大阪関西万博」へ同行し、シンポジウムにも参加。今回、海外視察をきっかけとして、その後もAIAとの関係が続いているのは我々メンバーにとって本当に嬉しい限りです。



旅先の名建築



築地本願寺(伊藤忠太設計、1934年竣工)

た際に、本堂のドームに瓦場がかけられ改修工事が進められていました。耐震補強や漏水対策を行なながら、建具補修や彩色補修を進めるそうです。竣工から約90年に渡り信仰の中心であり続けた築地本願寺が、将来に引き継がれていくことは素晴らしい取り組みです。近畿圏においても歴史的な建築物が多数残されていますが、維持が困難になり解体の危機にあるものを頻繁に耳にします。その価値をJ-Aの活動において広く共有して、歴史的な建築物の活用について取り組みたいと思います。

菅原英房 JIA近畿支部 兵庫地域会長 HYOGO

OSAKA 坂井信行 JIA近畿支部 大阪地域会長



綿業会館(X-T50で撮影)

つてまちへ出よう――

カメラを入手しました。レンズは28-70mm単焦点のスナップショーター。“デジタルもそろそろ一眼カメラが欲しいと思つた頃、キヤノンに乗り換えました。マウントアダプターをつければコンタックス時代のレンズが使えるという理由もありました。長く使っていましたがEOS 5D mark IVというカメラは外に持ち出して使つもの。5Dという重いカメラも年齢とともにしんどくなつてしましました。そこでこの度、思い切つてフジフィルムのX-T50という小型のカメラに乗り換えることにしました。このカメラの面白いところは、フィルムシミュレーションというフィルム時代の画質をデジタルで再現する機能があることです。

コンタックスからデジタルのGR、EOS、そしてフジのXへのデジタルではありますが、フィルム時代に回帰したような印象もあります。風景や建築を撮ることが多いですが、まちなかでのスナップも増えそうです。みなさんもカメラを持つてまちへ出てみてはいかがでしょう。

大阪

—— カメラを持つてまちへ出よう！

A wide-angle photograph of a traditional Japanese building with a tiled roof and wooden facade, situated on a paved street. The building is surrounded by trees and utility poles. The sky is clear and blue.

地域の登録文化財のこれからを考える

今後はこの経験を活かし、会員の皆さんのが活動しているそれぞれの地域をクローズアップできるような事業として、それぞれの地域が勇気を得られるような学びの会として取り組んでいけると良いなあ、と感じています。興味深く周りを見回せば、学ぶための素材がゴロゴロしている。そのような豊かな地域で活動していくことを楽しんでいきたいものです。

法資料会場「」の開催を継続し、今
フォーラム」の開催を終えました。」
年度で15回目を数えました。」
Aが、大津市から「古都大津の風
格ある景観をつくる基本計画」
もと、「景観整備機構」として認定さ
れていていることから、大津市の協
力もいただき、地域の歴史風土に
支えられて保全してきた史跡を
や変遷してきた街並みの歴史を
たどるワークショップを開催しま
きました。市民に開かれたこの
会には、毎回定員を超える参加者

して歩くことで、地域資源の根柢となる地域資源を知り、街が変わつていった時代背景を理解する貴重な機会となっています。

経済や交通の要所であり歴史文化についても豊かな資産を持つ大津市を中心に、この事業をいちから立ち上げ担当してきた谷祐治氏、そして一緒に支えてきた会員も、この事業で地域の皆さんと一緒に地域を学ぶ姿勢を身につけてきたように思います。

SHIGA 平居 晋 JIA近畿支部 滋賀地域会員

岡田良子 JIA近畿支部 京都地域会長

京都 岡田良子 JIA近畿支部 京都地域会長 KYOTO

最近、私の周りの建築家たちも、大学で新たに建築を学び直す人が、またたく間に増えました。さすが、建築家は立ち止まつて、いみなと感心するとともに、大変な気になります。



建築と子供たちのワークショップ風

昨年、私事ですか在りが亡くなりました。享年百八歳の大往生でした。だが、百歳を過ぎても現役で表千家のお茶道を教えるなど近所ではちよつと有名なおばあさんでした。小学校の先生をしていたせいか、退職してからも何かといろいろなことにチャレンジをしていましたが、祖母が九十歳になつたとき、「九十歳を機に陶芸を習い始める」と言い出しまして、亡くなる数年前まで続けていましたから、かれこれ十年以上はやつてことになります。それだけ続けると、なかなか本味のある作品もできるようになってきて、なにかを建築の仕事をしていると、いつの間にか、先生でもないのに先生と呼ばれ、謙虚さみいたるのから遠ざかってしまいがちになります。建築でも建築以外でも、新しく自分の師匠を見付けて、初心に戻って学び直すのは、済々しい気

文化財級の民家の未来のために — 奈良

お話し会の様子



により、今後の事業計画の方針を決めるための「アイデアコンペ」の実施を提案しました。6月2日に要項が発表され、現在、参加募集中です。自由な提案を求めており多くの応募が予想されています。ご興味がある方はぜひ参加を希望するところです。これから時代の先取りをするようなアイデアを期待しています。

また昨年度から建築家の立場で、奈良の登録有形文化財所有者の会の立ち上げ準備のサポートを行っています。奈良県内の文化財級の民家保有者を対象に維持管理や建築をどう未来に引き継ぐかといった多くの課題を、所有者の方々と定期的なお話し会を行なうながら、会の立ち上げ準備をしているところです。全国的に空き家問題が社会的課題になつてますが、共通する課題もあり新たな活動に向けて模索中です。

奈良地域会では昨年度は葛城市の委託事業による「かつらぎみらいの森」アイデアコンペの実施協力をさせて頂いています。使われなくなつた生涯学習センターとその立地する周辺の公園と地域を含めた新しい地域活性化のアイデアを募ること

NARA 山本光良 JIA近畿支部 奈良地域会長

WAKAYAMA

和歌山

ほぼ毎月、勉強会を開催



10月には毎年行っている建築ツアーカンペーンで開催しました。今年は新潟方面で泊3日で目いっぱい建築を楽しんでいました。今年も和歌山地域会の活性化のために色々と勉強会の企画を考えています。

瀧川嘉彦 JIA近畿支部 和歌山地域会長

table

table 5号 2025年10月1日発行

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部 大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館4階

企画・制作 JIA近畿支部 広報委員会 紙媒体ワーキンググループ
萬野光雄(萬野光雄建築設計事務所)・広報委員長
梅原悟(UME architects)
遠山健介(遠山健介建築設計事務所)

西本寛史(nha)
竹内厚
タナカタツヤ
間芝勇輔

編集・取材
デザイン
表紙ビジュアル



わたしのtable

vol.05 中田光輝さん(GENETO)の事務所テーブル

事務所移転の際に制作したテーブルです。天板の長さ4m、天然石研ぎ出しのテラゾーとなつていて、この場で淡路の左官職人の植田俊彦氏と共に手作りしたものです。天然石は一つ一つ手作業で疎と密を意識して埋め込み、数日間掛けて削り出してきました。単一的な表情ではなく、動きのある表情に仕上げることができました。マックス14人は座って対話することができるため、事務所での会議用だけでなく、人を招いての食事会やパーティーにも活用されています。

和歌山地域会ではほぼ毎月会員のための勉強会を開催しています。和歌山地域会の会員が大阪で開催されている講演会等に参加するのが難しいこともあり、独自に勉強会を開催して会員の建築に対する知識ややる気の向上を目指しています。勉強会には和歌山地域会の協力会員さんが商品PRをする時間を設け、会員企業の皆様との交流も行っています。

また会員外の方も多数参加してもらっていますので将来的に会員の増加につながれば良いなどと考えています。

昨年度の勉強会は4月の総会記念講演会に第16回関西建築大賞を受賞された魚谷繁礼氏にお越しいいただきました。京都の町

は11月22日に和歌山で開催される近畿支部のプロジェクトにいたしました。こちらのプロジェクトは現地にお伺いして見学させていただきました。大工を本業とされている伊藤智寿氏が自ら古い建物を買い取り、自身で改修してカフェや飲食店を作り地域の方と共に街づくりを行つていただきレクチャーリングで、現地で自身にご案内いただきました。

また、このプロジェクトは11月22日に和歌山で開催される近畿支部のエクスカーションでご参加の皆様にも見ていただきました。この間、和歌山で開催している建築ツアーカンペーンで開催しました。今年は新潟方面で泊3日で目いっぱい建築を楽しんでいました。今年も和歌山地域会の活性化のために色々と勉強会の企画を考えています。

table



table

建築家と建築から
街を活きづけるマガジン

